

ネフスキー『宮古方言ノート』の内容について

宮古郷土史研究会 下地和宏

はじめに

ロシアの民族学者、言語学者であるニコライ・ネフスキー (1892~1937) は、1922 (大正 11) 年、26 (大正 15) 年、28 (昭和 3) 年と 3 度宮古島を訪れている。伊良部村長の國仲寛徒をはじめ富盛寛卓、本村朝亮、本村恵康、狩俣吉蔵、慶世村恒任ら宮古の知識人らと交流を重ね、宮古島の民俗、アヤゴ、言語を調査研究している。その成果は雑誌『民族』などに発表されている^①。また、「宮古諸島の語彙研究のための資料集」を作成、宮古方言辞典の編纂を目指した。1923 年 8 月 20 日付で高木誠一に宛てた書簡に「私は昨年旅行致しました宮古島の字引をこさえて居ります」と記している^②。宮古方言に関する辞典を作成することは、第 1 回の調査段階で決めていたのであろう。

2005 年、平良市教育委員会はこの草稿の複写本を『宮古方言ノート』(上・下) (以下『方言ノート』と略す) として刊行した。ネフスキーの『方言ノート』は、80 年余の時を経て市民の目に触れ、手にすることが出来るようになった。今では多くの人々に活用され重宝されている。この複写本を活字本にして、より多くの市民が活用できるような環境になればと思う。

この『方言ノート』には 100 年前の宮古の方言語彙がアルファベット順に音声表記で記録され、ロシア語、日本語および英語をおりまぜて説明が記されている。

『方言ノート』には見出し語だけでも 5700 語をこえる方言語彙が収録されている。また、関連語として沖縄本島、八重山諸島、奄美大島、および日本各地の語彙が紹介されている。それ

から 10 数種におよぶ資料から関連語彙を引用している。最も多いのは「混効験集」の 141 語、次に「おもろさうし」の 22 語、「物類称呼」の 22 語を引用している。「物類称呼」は日本で初めての全国方言集として知られている。

言語資料の提供者として (國仲) や (Tjima)、(Miyara) の名前が記されている。そのなかで最も多いのが (國仲) で 341 語、(Tjima・田島) が 119 語、(Miyara・宮良) が 80 語である。

本稿は『方言ノート』に収録された方言語彙の内容分析を通して、ネフスキーが南島の宮古島に込めた思いに触れることが目的である。また、宮古の歴史、民俗、文化および自然を再認識することでもある。

1、『宮古方言』ノートの語彙

収録された方言語彙は 22 部落・地区におよんでいる。その中で平良地域の平良地区が全体の約 5 割 (3315 語) を占め、次に伊良部地域の佐和田部落がおよそ 2.5 割 (1687 語) を占める。宮古の方言語彙はこの両地区で 7 割余を占めていることから、平良、佐和田の両地区を中心に収集されていることが読み取れる。

下地地域からは 315 語収録されているが、その約 7 割 (215 語) は上地部落である。多良間地域からは 447 語が収録されている。これらの地域とは対称的に城辺地域からは、わずか 7 語しか収録されていない。

見出し語の語彙には、参考語彙として音声異なる他部落・地区の語彙が記されている。地域別に示した語彙の数は、これらの語彙もカウントしたもので、およそ 6800 語収録されてい

る。

カウントした地域の語彙数には極端な違いはないと思うが、概数であることを断っておきたい。平良、下地、城辺、伊良部、多良間の5地域の語彙数を部落・地区別に示した。

(1) 平良地域 3661 語

①平良 3315 語、②池間 101 語、③狩俣 120 語、④島尻 66 語、⑤大浦 8 語、⑥西原 36 語、⑦野崎 15 語。

(2) 下地地域 307 語

①下地 12 語、②上地 215 語、③与那覇 21 語、④来間 24 語、⑤野原 28 語、⑥野原越 7 語。

(3) 城辺地域 8 語

①城辺 1 語、②保良 6 語。

(4) 伊良部地域 2463 語

①伊良部 92 語、②伊良部・仲地 25 語、③国仲 33 語、④長浜 21 語、⑤佐和田 1687 語、⑥佐良浜 588 語。

(5) 多良間地域 447 語

①多良間 403 語、②水納 44 語。

2、ネフスキーの足跡

ネフスキーは、どれくらいの日程で宮古島の調査を行ったのか、その足跡をたどることにする。ネフスキーはアヤゴ、トーガニ、方言語彙、民俗などを精力的に収集している。

岡正雄編『月と不死』(1990)、加藤九祚『完本 天の蛇』(2011)、共訳『宮古のフォークロア』(1998)、田中水絵『歌の島・宮古のネフスキー』(2022)などを二次資料として借用、ネフスキーの足跡をたどることにした。

(1) 1 回目の調査 (1922 年)

ネフスキーは上運天賢敷を伴い奄美・沖縄を経て7月28日、漲水港に入った⁽³⁾。この船には帰省途中の沖縄師範学校の学生下地馨(1903年生)もたまたま乗り合わせていた⁽⁴⁾。

漲水港に降りたネフスキーは、「嘉手納旅館」を宿舎とした⁽⁵⁾。上運天賢敷の案内でまず富盛寛卓を訪ねた。下地馨もついてきた。

富盛寛卓(1871~1924)は沖縄県尋常中学校(のち一中、現首里高)を卒業。沖縄学の創始者・伊波普猷の1年先輩にあたる。明治43(1910)年、平良尋常高等小学校で訓導をしていた頃、『郷土誌』を著わした⁽⁶⁾。『方言ノート』に「baka-miži」の話が記載され「平良村の富盛寛卓氏の話」と記されている⁽⁷⁾。「baka-miži」とは「若水。変若水」のこと。富盛は当時51歳。

ネフスキーは伊良部島に渡る予定であったが、海が荒れていて船も出ないので、天候の回復を待つしかなかった。

8月3日、平良で本村朝亮から「トーガニ」(即興歌)6首を聞き取り、書きとめた⁽⁸⁾。本村朝亮(1876~1937)は元平良村長(1917~1919)で郷土史家でもある。本村は当時46歳。

〈伊良部島〉8月5日~12日

8月5日、海はまだ荒れていたが、新里という人が現れ、私を伊良部島まで案内するために昨日やってきたと言った。ネフスキーは新里のサバニ(割り船)で伊良部島南部の渡口港に上陸した⁽⁹⁾。

ネフスキーは、国仲部落に向かう途中にある乗瀬御嶽に参詣し、この社にまつわる伝説や祭事を書きとっている⁽¹⁰⁾。

ネフスキーは、午後5時20分頃、伊良部村役場を訪ねたが、国仲寛徒(1873~1929)村長はすでに帰宅していた。役場の人が馬を用意して、約1里離れた佐和田の村長宅まで案内してくれた⁽¹¹⁾。国仲は沖縄県師範学校卒、村長2期目(初代、2代)で当時49歳。

午後10時頃、ネフスキーは村長夫人の歌う古謡「イスンミノアカラギー」(石嶺のアコウ木)を速記した。ネフスキーは一曲終わると速記した歌の文句を朗読した。その一言一句の正しさ

に一同驚異に打たれたという⁽¹²⁾。

翌6日、馬に乗って北部の佐良浜に向かった。神カカリヤに会うのが目的であったが、あいにく不在であった。

ネフスキーは「私は佐良浜に短時間しかいなかったもので、ズィーユミヤの呪文を記録できなかった。」⁽¹³⁾という。ズィーユミヤ〈zī-jum'a〉とは「呪ヲ言フテ病氣ヲ治スル専門家」のことである⁽¹⁴⁾。

「佐良浜小学校で住民と民俗学的テーマで話し合い、前泊金吉から生まれた子供に起きたムナイについて聞」いた⁽¹⁵⁾ともいう。「それから佐良浜で結婚式を見せてもらい、細かくノートにとった」⁽¹⁶⁾ともいう。

1923年、京都大学史学研究会で「宮古島の結婚と祭礼」の講演を行っているので、佐良浜での調査は1回目の1922年に実施されている。

これらの調査はいつ佐良浜で行われたのだろうか。調査内容からすれば、6日より後、再度佐良浜に行ったことになり、具体的な日にはわからない。

6日佐良浜から戻ったネフスキーは、国仲部落で8人の住人から7首のアヤグを採録した。国仲部落は3人、伊良部部落は1人、仲地部落は2人、長浜部落は2人である⁽¹⁷⁾。

8日には佐良浜の老人からアヤグ「はいゆかなすい(エイ、豊作の神!)」を採録した⁽¹⁸⁾。しかし、採録した場所が佐良浜かどうかは不明である。

8月13日、ネフスキーは宮古島にもどっている、伊良部島での調査は、5日から12日までの1週間であったと見られる。

国仲村長からおおよそ340語におよぶ語彙の説明、さらにアヤグの聞き取りを1週間でこなしたことになる。方言語彙は伊良部(5部落)が1858語、佐良浜が605語、伊良部地区の語彙おおよそ2463語が『方言ノート』に収録されて

いる。平良地区(3315語)に次ぐ語彙数である。

〈宮古島〉8月13日～14日

宮古島にもどったネフスキーは、13日狩俣で、アヤグ「根間の主」を狩俣吉蔵(1884～1967)から聞き取った⁽¹⁹⁾。狩俣は郷土民俗に強い関心をもっていた。妻は御嶽の神女をつとめていた。狩俣は当時38歳。

同13日、島尻で年配の婦人(40歳)から[ぴいとうゆみや あーぐ(或るお嫁の歌)]を記録した。しばらくして、5人の婦人いっしょにこのアヤグを歌ってもらった⁽²⁰⁾。

翌14日、大浦で一人の老人からアヤグ[かむむ なぎゃーぐ(神の同情を乞う歌)]を書きとめた⁽²¹⁾。

同14日、西原の本村恵康を訪ね、アヤグ「根間の主」を筆記した⁽²²⁾。

〈多良間島〉15日～17日

「同年、私が多良間島に滞在していた時、垣花春綱という青年から、同じ様な物語[「baka-mizī」の話]を聞いた。」⁽²³⁾という。「同年」とは「大正11年夏」⁽²⁴⁾のことで、1回目の調査1922年には多良間島に渡っていたことになる。大浦、西原でアヤグを採録した翌日の15日には多良間島に渡った。天候には恵まれていたのであろう。

15日、垣花[春用]さんより[しよーがついぬ えーぐ(正月の歌)]をメモした⁽²⁵⁾。16日、垣花春用さんから[かむなたなどうるぬ えーぐ(カムナタナドゥヌの歌)]をメモした⁽²⁶⁾。

日付は不記載だが、垣花春用(50歳位の男性)から[ぶながまが えーぐ(ブナガマの歌)]をメモした⁽²⁷⁾。

多良間では50歳くらいの垣花春用さんから3つのえーぐ(歌)を収集したことになる。

また、日付は不明であるが、「baka-mizī」の話が「多良間島、垣花春綱氏より聞いた話」として『方言ノート』に記載されている⁽²⁸⁾。

ネフスキーは18日には平良でアグを採録しているの、少なくとも18日には多良間島から宮古島に戻っていたことになる。すなわち、多良間島での調査は15日から17日までの3日間位ということになり、水納島に渡る余裕はなかったと思われる。

多良間島の語彙403語、水納島の語彙45語が『方言ノート』に収録されている。水納島の語彙は多良間島で収集したのであろう。

〈宮古島〉18日～？

18日宮古島にもどったネフスキーは、平良で援助者である多良間島の渡久山老人からアグ「たらまゆーぬなうらば(多良間で豊作になったら)」をメモした⁽²⁹⁾。

ネフスキーが調査を終えて宮古島を離れた日付は不明であるが、多良間島からもどった8月18日以降ではある。となれば、ネフスキーは1回目の調査におよそ3週間を費やしたと思われる。

(2) 2回目の調査 (1926年)

ネフスキーは8月1日奄美大島を經由して3日那覇に着いた⁽³⁰⁾。7日にはネフスキーは宮古の旅館で「南島旅行日記」を書いているので、5日あるいは6日に宮古入りしたことになる。今回の宿舎は「八千代旅館」である⁽³¹⁾。

7日、ネフスキーは、来訪した久松小学校校長の三島良章(1879～1968)、慶世村恒任(1891～1929)らと弁当を持って野崎村に出かけた⁽³²⁾。当時三島は47歳、慶世村は35歳。その時の収集であろうか、野崎の方言語彙15語が『方言ノート』に収録されている。

8日から16日までの9日間、ネフスキーの行動は不明である。

2回目か3回目の調査なのかは不明だが、8月11日、平良の糸数鎌三翁から「すいまむみ(島の嶺)」のアヤゴを書きとめている⁽³³⁾。

ネフスキーは、下地地区の上地・与那覇・来間・野原部落の調査を何時どのように行ったのか、不明である。あるいは、ネフスキーの行動が不明な期間に下地地区の方言語彙は収集されたのであろうか。

下地4部落の語彙307語が『方言ノート』収録されている。また、上地部落での聞き取りと思われる謎々が7例収録されている。

それから、城辺の語彙1語、保良部落の語彙6語も何時どのように収集されたのか不明である。

17日、ネフスキーは那覇行の汽船に乗る。その時、慶世村恒任から「アカリヤザガマ」の伝説を聞いている⁽³⁴⁾。

2回目の調査は少なくとも7日から17日までの10日間ぐらいであろうか。

(3) 3回目の調査 (1928年)

ネフスキーは8月3日来島⁽³⁵⁾、今回の宿舎は「大正館」である⁽³⁶⁾。

4日、池間の住人で祖母から聞いたと言うウパルズ御嶽(大主神社)の伝説を書きとめた。5日朝、慶世村恒任が訪問。しばらくして、旧友の下地ソチ(紹知か)が現れた。6日朝、下地カンロ(寛路)が訪問。田中春栄(下地に改姓)が訪問、昨年書きとめたという「つすとういぬあーぐ(白い鳥の歌)」を受け取る⁽³⁷⁾。

田中は、[1928年]8月15日付のネフスキー宛ての国仲寛徒の手紙から、ネフスキーは宮古滞在中に国仲寛徒に会った、と考えている⁽³⁸⁾。

8月16日、平良で野原越部落の島村武雄から34首の「たとえ話(迷信)」を聞いている⁽³⁹⁾。

7日から15日までの一週間、ネフスキーの行動は不明である。

ネフスキーが池間島に渡ったのかどうかについて、田中はネフスキーの論文「神酒」を提示する。論文に「池間島で、ある家に土産の酒を

持って行くと、その家の主婦は、まず小さな盃（日本風）に酒を注ぎ、やはり歌うようなリズムカルな調子で私に礼を言い（註・下線は下地）、神々に祈りながら神棚に盃を供えた。」と書かれている。「年月日は不明だが、ネフスキーは池間島に渡ったのである。」⁽⁴⁰⁾と強調する。

ネフスキーは、2週間の調査を終え18日には帰路についた⁽⁴¹⁾。

年度は不明だが、8月21日、佐和田の国仲寛リツ（栗）からトーガニ2首を書きとめている⁽⁴²⁾。国仲寛栗（1897年生）は寛徒の長男で、ネフスキーが来島した1922年、26年、28年には伊良部島を離れて東京で教師をしていた⁽⁴³⁾。田中が問いかける「彼は何時、何処でネフスキーにトーガニを伝えたのか。」⁽⁴⁴⁾は、まだ霧の中である。寛栗は後、山下邦雄に改名している。

3、方言語彙の内容

方言語彙を内容別に23項目に分類したのは、あくまでも個人的な感覚によるものであることを断わっておきます。

親族語彙、身体語彙、医療語彙および形容詞語彙についてはアレクサンドラ・ヤロシュさんが法政大学沖縄文化研究所『琉球の方言』（40号～43号）に2016年から2019年にかけてすでに報告している。ヤロシュさんはロシア語の翻刻もなされているので、ロシア語で説明された内容が理解できてとても貴重な報告である。また、歴史語彙については本永清が『沖縄文化』108号（2010）に「人頭税関連語彙」（208語）として報告している。歴史語彙（340語）のおよそ6割はこの「人頭税関連語彙」にまとめられている。

方言語彙は内容別に以下のように23項目に分類した。但し、項目によっては重複する語彙もある。

（1）歴史に関する語彙

- （2）民俗に関する語彙
- （3）機織りに関する語彙
- （4）農具・道具に関する語彙
- （5）家屋・屋敷に関する語彙
- （6）親族・家族に関する語彙
- （7）衣類に関する語彙
- （8）飲食に関する語彙
- （9）地名・井に関する語彙
- （10）自然・歳時に関する語彙
- （11）海に関する語彙
- （12）昆虫・虫に関する語彙
- （13）鳥に関する語彙
- （14）動物に関する語彙
- （15）植物に関する語彙
- （16）樹木に関する語彙
- （17）身体に関する語彙
- （18）医療に関する語彙
- （19）玩具・遊びに関する語彙
- （20）性格等に関する語彙
- （21）学問等に関する語彙
- （22）職業等に関する語彙
- （23）人名に関する語彙

以下、各項目の具体的な方言語彙の事例を見ることが出来る。その前に、音声表記で記された見出し語の後にある（ ）の中には地域名が略号で付されているので、略号と地域名を確認しておきます。

（1）平良地域

(Ps) 平良。(Ik) (Ikima) 池間。(Kaz) (Kazm) 狩俣。(Sima zi) 島尻。(Upura) 大浦。(Nsib) (Nisibaru) 西原。(Nuz) (Nu:zaki) (Nu:saki) 野崎。

（2）下地地域

(Simuzi) 下地。(Ui) 上地。(Yunapa) 与那覇。(Ffima) (Ff) 来間。(Nubari) 野原。(Nubarigusu) 野原越。

(3) 城辺地域

(Gusikubi) 城辺。(Bura) 保良。

(4) 伊良部地域

(Irabu) (Irav) 伊良部。(Irav-Nakaci) 伊良部・仲地。(Fumn) (Fumnaka) 国仲。(Nag)

(Nagah) 長浜。(Sa) 佐和田。(Sarah) 佐良浜。

(5) 多良間地域

(Ta) (Tar) 多良間。(Min) (Minna) 水納。

ここからは具体的な語彙の事例を見ることにする。語彙の(露)で表示したロシア語の説明は、ヤロシュさんが「報告」された翻刻を引用した。語彙の説明に付された(國仲)は伊良部村長の國仲寛徒、(Tjima)は琉球研究の先駆者・田島利三郎、(Miyara)は八重山出身の言語学者・宮良當壮のことである。なお、地域名は漢字で示した。引用文献は「」で示した。語彙数は概数である。

(1) 歴史に関する語彙 (340 語)

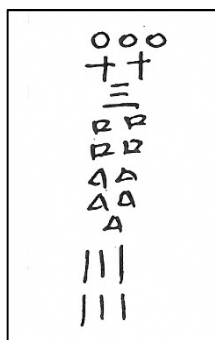
a:ʒaunau (佐和田) 粟上納。

粟上納ノ徴税令書。

至ッテ簡単にて「ヤラブノ木」ノ葉ノ前半面ニ

一、粟三俵二斗三升四合五勺六才

其ノ後半面ニ、



ノ符号を記シ其下ニ屋号ト名前トヲ書付タリ。屋号名前ハ士族ナラバ内間友利小也、平民ナラバまどの釜等ノ如シ。

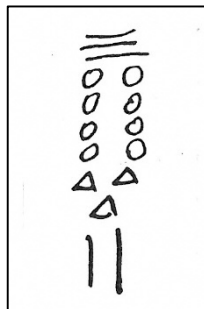
但し平民ニハ之を交付セズ戸主ヲ招集シテ口頭示達シタルナリ (國仲)

nunu-ʒaufu (佐和田) 布上布。

布上布の令書。

(a:ʒaunau) jaravgi:ノ葉ノ前半面ニ

一、上(中、下)布三尋四勺三寸二分
他ノ半面に



と記シタリ (國仲)

ban ʒu (佐和田) 番所。bumm'a:トモ云フ。

里ノ中央ニアリテ、字佐和田ヲ納タル公署ナリ。其ノ面積壹千三百拾五坪ニシテ其ノ中ニ左ノ建物アリキ。

(イ) 本家 (uikaja:), (ロ) ukuzzaja:, (ハ) nagaja:, (ニ) aʒza:, (ホ) takaraja:/ta:raja:, (ヘ) fuɫɫa:。

[〈註〉(イ) 筆者の家。(ロ) 大爺僕屋。(ハ) 長屋。(ニ) 藍屋。(ホ) 俵屋。(ヘ) 便所。]

junéu (平良) (佐和田) (多良間) 與人。

人民ハスベテ主 (su:) 又ハ敬シテ主加那志 (su:ganasi) ト申シテ字ヲ統治スル職務ヲ有セシ字長ナリキ。平良人ニ限り任命セラレ、片髪ニ銀ノ髪差ヲ差シ、月ニ一回一週間バカリ滞在シ其ノ余ハ平民ノ自宅ニ住ミシ也。給料ハ一カ年御物粟四十俵 [(國中)]

(以下、ロシア語の説明が続く)

mizasi (平良) (伊良部) (佐和田) 目差。

與人ヲ補佐スル吏員ニシテ銀髪差ヲ用ヒズ、常ニ番所本家ノ一番座ト二番座ノ間ニ坐シテ、其ノ勤務振ハ略々與人ニ似タリ。給料ハ一カ年粟二十俵 [(國中)]

piśsa (平良) (伊良部) (佐和田) 筆者。

在番所カラ辞令モテ命セラレタル吏員ニシテ、杣山筆者(森林係)耕作筆者(農事係)耕作仮筆者(農事係)ノ三種アリ。與人ノ命ヲ(受)ケ帳簿ノ整理ヲ分掌セシナリ。給料ハ一カ年粟八俵 [(國中)] (八重山) piʒa

kainau-gurui (佐和田) 皆納揃。

毎年旧六月二十日人民悉く集会シ租税未納者ヲ督促シ財産ヲ尽シテ納付シ能ハザル者ヲ捕縛打撃シタル上富豪ニ売却シ年季奉公ヲ為サシメタリ [(國中)]

mim-p'ik'a:i (佐和田) 面引合。p'ik'a:i トモ云フ。

在番一人、頭一人、首里大屋子一人、指主 (ujabišu:) [大筆者、脇目差、脇筆者] 一人以下蔵元在勤ノ随行吏員四、五人年ニ一回出張シ来リ人民ヲ調べ、番所事務ヲ検閲セシコトナリ。此ノ番所南庭ニ平民ノ戸主ヲ跪坐セシメ御條書ヲ讀ミ聞カセタリ。讀ム者ハ指主ニシテ一番座ノ机上ニ御條書ヲ載セ一条讀ミ終ル毎ニ聞ク者ヲシテ u: ト称ヘテ敬礼セシムル例ナリキ [(國中)]

(2) 民俗に関する語彙 (385 語)

aʃi 平良村ニテハ子供出生スレバあじト称シテ薄ヲ長サ七寸位箸状ニ切、日本ヅツ其ノ一端ヲ糸ニテ結ビ戸口毎ノ左側、或ハ右側ニ吊ス。外ニ向ッテ左側ナレハ男子ニシテ右側ナルハ女子ノ出生ト知ルベシ。来間島ニテハ同様ノ長サノ薄二本、十字形ニ結ビ古キ綱切ト共ニ之ヲ戸口ニ吊シ置ク。之ヲヤハリあじト称ス。出生後、十日目ニあじヲ外シ取ル。之ヲ **aʃi-panasī** ト云フ。伊良部島ノあじハ大概二本ノ竹片ヲ十字形ニ結ビテ戸口ニ吊シ置ク。故ニあじノコトヲ能クあじだき (アジ竹) ト云フ。同島ノ佐良浜村ニテハ主産後、満十日 (tu:kaṃti) ノ日ニ産婦ガ戸口戸口ノあじヲ取集メテ、之ヲ自体ノ上ニ持ち、其ノ上カラ体ヘ水ヲ注グ習慣アリ。丈夫ニナル為メトカ云フ。多良間島ニテハ出産アル家ノ戸口ニ薄一本ヲ差ス。之ヲあじト言ハズシテ **jadu** ト称ス。沖縄本島ニモ以上ノ場合ニハ軒ヘ一本カ二本ヲ差ス習慣アルト聞ケリ。

(以下、ロシア語の説明が続く)

baka-mizī (平良) (多良間) 若水。変若水。

節祭 (šici) ノ日ニ朝早く井戸カラ水ヲ汲ンデ来テ家内中之ヲ浴ビル習慣ガアル。サウスレバ若クナルト信ゼラレテイル所カラ此ノ水ヲ若水ト名ツク。此ノ若水ニ就テハ次ノ伝説ガアル。「節ノ夜ニハ人が蛇ヨリ先ニ若水ヲ浴ビテ居ッタカラ人ハ若ガヘリシタガ蛇ハ若ガヘラズニ居ッタ。処ガ或年人ガ蛇ニ負ケテ、若水ヲ浴ビテモ蛇ハ若ガヘリシ、人ハ若ガヘラヌ様ニナッタトサ」(平良村ノ富盛寛卓氏ノ話)。多良間島ニモ同様ノ話ガアル。即チ極昔ノ時ニハ人間ガ死ヌトイフ事ハナカッタ。ナゼナラバ毎年節ノ夜ニ天カラ若水ガ落チテ、人間ガ他ノ動物ヨリモ先ニ之ヲ浴ビテイタカラデアル。ソノ水ヲ浴ビルト古キ皮膚ガ脱レテ人ガマタ若クナッテイタ。処ガ或年蛇ガ人ヨリモ先ニ若水ヘ入浴シタ。人間ガ来タ時、水ガキタナクナッテイタ。ソレヲ見タ人間ガ入浴セズニ只手ト足ダケヲ洗ッタ。其後ハ蛇ガ脱皮シテ若ガエリ、人間ハ若ガヘラレナクナッタ。唯手足ノ爪バカリガ始終脱レテ生々シテイルト (多良間島、垣花春綱氏ヨリ聞イタ話)

(以下、ロシア語の説明が続く)

daki-masī (平良) 抱柎。

出生後初メテノ十五夜 (旧八月十三、十四、十五ノ間) ニハ抱柎ト称シテ米粉ニテ神酒 (ŋkšī) ヲツクリ酒肴ヲ供ヘ祖先並ニ氏神ニ祭り、且ツ抱柎祝トシテ親族近隣ニ贈ルヲ例トス。

(以下、ロシア語の説明が続く)

ju:kuz (平良) (佐和田) (佐良浜) 世乞。

字人民団体ヲ以テ行ヒシ祈祷ノ名。今ノ祈年祭豊年祭ノ如シ。但シ粟ヲ嚙ミテ醸シタル ŋkšī/ncī (神酒) ヲ供ヘタリ [(國中)] 旧九月中ニ行フ祭。其ノ祭ヲ行フ御嶽ヲ **ju:kuz-utaki** 又ハ略シテ **ju:kuz** ト称ス。

sīma-fūsara (平良) [悪払]

平良付近ノ村々ニテハ旧六月頃、sīma-fūsara トテ悪払ヲ行フ。部落ノ男バカリ一定シタル御嶽ニ集ッテ其ノ豚ノ骨ヲ掛ケル習慣アリ。

(琉球) *śīma-φūsaraśi* <*śīma-kūsaraśi*.

mmari-baŋ (佐良浜) 「生マレ判」ノ義。

赤子ノ額ニ鍋煤デツケラレタ点。満十日 (*tù:kamti*) ノ日ニ之ヲ拭取ル。

uy-daci (平良) 「初立」ノ意。

外出ノ初ハ *uvdaci* ト称シ、出生後三回目ノ庚辛ノ日又ハ五回目ノ庚辛ノ日即チ三十日後ニシテ第一ニ祖先及ビ氏神ヲ拝セシメ、其後親類ノ祖先ヲ拝セシム。此時ニハ菓子又稲餅類ヲ持参スルヲ例トス。

(3) 機織りに関する語彙 (58 語)

manuci-nu-bu (佐和田) 機の部分。「招き緒」の意。布片ヲ *manuci* ノ中央ニ結ビ、其ノ先ヲ右足ノ拇指ニテ引 *manuci* ヲ上下セシム [(國中)]

(以下、ロシア語の説明が続く [(*kuninaka*)])

nunu-nu-umaci (佐和田) 「布の火」の意。

機織スル時ニ経糸ヲ乾カス火。古鍋ニ燠ヲ入レタルモノ [(國中)]

(以下、ロシア語の説明が続く [(*kuninaka*)])

uk^cu-ganamal (佐和田) 機の部分。「大頭」ノ意。

経糸ヲ巻キタル丸木。梯悟ニテ造る [(國中)]

(以下、ロシア語の説明が続く [(*kuninaka*)])

pata-munu (平良) (佐和田) (国仲) 機ノコト。

反布ヲ織ル機具。経糸ヲ巻キタル間ハ、*nunu-bata* ト称ス [(國中)]

(以下、ロシア語の説明が続く [(*kuninaka*)])

[*pata* // (日) *hata* 「露」 + *munu* // (日) *mono* 「露」]

[(石垣) *pato:munu*。(名護) *fata-munu*。]

ur'a: (平良) (佐和田) 布ヲ織ル者 (女)。

(4) 農具・道具に関する語彙 (323 語)

biraf (平良) (佐和田) 竹、蔓等ニテ造リタル籠ニシテ甘藷、野菜、蝸牛等ヲ入ルルニ用フ。*taki-biraf* (竹製)、*katca-biraf* (蔓製) 等ノ別アリ。

(以下、ロシア語の説明がある)

fudami (平良) 鞋。

山野海ニ行クニ穿チタリ。アダナス (*adanaŋ*) ニテ厚ク製シタルヲ伊良部島ニテ *ki:vm* ト称ヘタリ [(國中)]

(以下、ロシア語の説明が続く [(*kuninaka*)])

[(琉球) *kudami-juŋ*。(佐和田) (多良間) *fudami*。]

ma:gu (平良) (佐和田) (佐良浜) (西原)

茅ヲ黒次 (*Didymosuperma engl*) ノ葉柄ノ皮ニテ編作りタル円形ノ籠。苧績マゴ、粟ススリ^{ヨネ}マゴ、大マゴ等ノ種類アリ。

[(肥後) *meگو* かつぐざる。(佐賀) *meگو* 目籠。]

puzo: (平良) 宝蔵ト書ク。

木製ノ小箱ニ蓋ヲ設ケ紐ヲツケ其ノ紐ニテ煙管ヲ結ビ腰ニ差シタリ。主ニ平民ノ男ノ用ヒシ葎入。

(以下、ロシア語の説明が続く)

[(佐和田) *puzau:*。(八重山) *puzo:*。(佐賀) *fuso:* 巾着の一種。宝蔵の義か。]

「物類称呼」巾着。きんちやく。常物にて。

ふうづうと云、云々。

sī:nudauy (佐和田) 「巢ノ道具」ノ意。

吸物椀 (*śi:munu-waŋ*)、八束椀 (*jasuku-waŋ*) 又ハ拾個ヲ一組ニシタル箱入ノ道具ト言フ意 [(國中)]

(5) 家屋・屋敷に関する語彙 (157 語)

asagi (平良) (佐和田) (佐良浜) 離れ座敷。

to:vva/tauvva (台所) ノ全面ニ本家 (puŋka) ニ向ハセ二間半ニ二間ノ建築ヲイフ。あさぎハ上流ノ住家ニアルノミ。中流以下ハ大抵あさぎヲ建テズ。あさぎノ半分ハ土間ニテ、ソコニ大和御竈トテ酒ヲ作ル為メ大キナ竈アリ。他ノ半分ニ床カケ (之ヲ asaginujukani トイフ)。二男以下ノ夫婦ノ住ム所ナリ。大抵上流の家にあるのミ。

(以下、ロシア語の説明が続く)

[(琉球) aśagi.]

ja:gama (佐和田) 小屋ノ意。

tauvva トモ云フ。台所ノコトナリ。二間角ヲ普通トス。本家 (puŋka) ノ右側ニ建テタリ。ja:gama ノ半分ハ床ヲ架ケ俵ヲ貯エ又ハ僕婢ノ寝所ニアテシナリ [(國中)]

(以下、ロシア語の説明が続く)

mmiagi-ju:z (佐和田) 棟上祝。

屋根ノ上ヘ塩 (ma:su) ト昆布 (kuɸ) ヲ懸ケル習慣アリ。

tukuru (平良) 「所」ノ義。

屋敷ノ東北ノ隅ヲ tukuru ト云フ。即神ヲ祭ル所也。jasik'inusi tukuru-nusiganasi ナド祈ル時ニ云フ [(田島)]

「混効験集」ところ tukuru 墓。

upu-ku:z (平良) 「大室」ノ意。

二番座ヲイフ (本家 (puŋka) ノ座敷ノ名)。目下ノ人ニ応接シ、長男ノ住ム部屋トス。其ノ奥ニ神棚 (kamitana) ヲ造リ先祖ノ位牌ヲ安置ス。又片隅ニ囲炉裏アリ。中央ニ天井ヨリ自在鉤ヲ吊シ鉄瓶ヲ掛ク。冬季ニハ家族ヲ囲ミテ火ヲ焼キ暖ヲ取り雑談ヲナス [(國中)]

[(佐和田) uk^cu-gù:l.]

(6) 親族・家族に関する語彙 (234 語)

ヤロシュさん報告の親族語彙は125語収録されているが、この項目には109語を追加した。

ucuza(:) (平良) 親戚。親類。兄弟。(露) 親戚、

親類、兄弟。

mmakata-nu utuza: 母方ノ親戚 (露)

母方ノ親戚

asakata-nu utuza: 父方ノ親戚 (露) 父

方ノ親戚

(伊良部) utuza。(佐良浜) (池間) utuža。(多良間) utu-dara。(八重山) utuza。

「おもろさうしXVII45」おとぢや。

「混効験集」おめとぢや umituža 兄弟の事おとぢやむた utužanta (那覇 utućanda) とも、おめと云字をいふ時は敬ふ言葉也。只おとぢや utuza 共云]

(id) おとぢや (utuza) 兄弟。(露) 兄弟のことも、姉妹のこともこう呼ばれている。平民の言葉においては他人のことも多少愛称を込めて utuža と呼ぶ。

buz (平良) (佐和田) 1、伯父。叔父 (姪甥ヨリノ呼称)。2、三十才以上ノ男子。

(露) 1、おじ。甥姪たちがおじのことをこう呼ぶ。2、30歳以上の男子への呼称。

(佐良浜) buža。(多良間) buda。(八重山) buz 百姓。(琉球) wunču。(日本) ozi <wozi>。

「混効験集」mu za/n za。下人。下女。

「混効験集」をんきよもい (wuŋk'u-mui) 伯父、叔父。

(露) おじもい (mui) (露) は多少の愛称を込めた単語である。例えば wuén-mi: 「おじ (日本語のローマ字表記) 召使の男 (年寄った人)

buba (平良) (佐和田) (佐良浜) 叔母 (姪甥ヨリノ呼称)。

(露) おば。おばさん。甥姪たちがおばのことをこう呼ぶ。

(伊良部) bubataja: utumuši 伯母等を招待して。

buzataja: utumuši 伯父等を招待して

(八重山) buba。(日本) oba <woba>。

ni:bici (佐和田) (佐良浜) 根引。結婚。婚礼。

沖縄からの輸入語。固有語は *sasagi* なり。(ロシア語の説明あり)

普通は身代金を出して芸婦妓の足を洗はせることを根引という。(奥里将建「琉球人の見た古事記と萬葉」CTP・81—82、nafa、1926)

[(琉球) *ni:bici*。(糸満) *ni:biki*。(名護) *ni:wiki*。(黒島) *ni:piki*。(日本) *ne-giki*。(徳之島) *ni:ki*。(伊須、古仁屋) *nubiki-ju:wé*。]

biki-dac'a (平良) 鰥夫 (ヤモメ)。

midum-daci (平良) 寡婦 (ヤモメ)。

(7) 衣類に関する語彙 (65 語)

bafysi-zin (佐和田) 耕耘用ノ作業服。裾ハ漸ク膝迄届ク。短衣。

(ロシア語の説明あり)

ducim (佐和田) 男ノ礼服ノ下着。分ノ襦袢ニ似タルモノ [(國中)] 胴着?

(ロシア語の説明あり)

[(琉球) *ducin*。(コハ) *duinu*。(名護) *rujin*。(コハ) *dušindi* 裕。]

itam (平良) (佐和田) 女ノ陰部ヲ隠ス褌ノ如キモノ。是ニ前垂ヲ着ケテルモノヲ *pani-itam* ト云フ [(國中)]

(以下、ロシア語の説明あり)

[(佐良浜) *icam*。(八重山) *mai cani*。(琉球) *mé:ca*。]

udau (佐良浜) 綿入レノ如キ着物。老人ノ冬季ニ用フル夜着 [(國中)]

tanasi (佐和田) 上流婦人ノ晴着ニ用フル上着 [(國中)]

(8) 飲食に関する語彙 (292 語)

fanca/fanc'a (平良) 野菜ノ名。

此ノ草ノ茎ヲ食ベタラ、ヨク眠ムラレルト云フ。(露) 野菜ノ名称。

[(佐和田) *fanša*。(琉球) *ka ŋso:* (萱草 *kwan 30*)]

jacī-munu (佐和田) 油揚類ヲ云フ。

小麦ノ粉ニ甘藷ノ澱粉等ヲ用ヒ、油ヲ入レテアゲタルヲ *pamɨŋ* ト云フ [(國中)]

(以下、ロシア語の説明あり [(*kuninaka*)])

nab'a:ra: (平良) (佐和田) 糸瓜。(露)

[(琉球) *nabè:ra:*。(八重山) *nabe:ra*。]

「雍州府志」(六卷、土産門上、雜菜部)ニ曰ク。絲瓜 倭俗所謂倍知麻是也云々。或亦洗鍋釜底亦可也。故中華村人呼為洗鍋釜羅瓜云々。

(ロシア語の説明あり)

[(石垣、コハ) *nabe:ra*。(黒島、波照間) *nabira*。

(与那国) *nabira:*。(新城) *nabera*。

(永良部) *na:bira*。(与論) *nabur'a:*。(喜界)

nabaraja:。(ヤマト、小湊、住用) *nabira*。(名

瀬、古仁屋、徳之島) *nabira*。(首里、那覇)

nabe:ra:。(名護、嘉手納、糸満) *na:be:ra:*。]

piz (平良) 蒜 (ヒル)。

腹痛ノ時、酒ニツケタル蒜ヲ疼部ニ着ク [(國中)]

菜園ニ栽培ス。全草臭気アリ。生食スレバ邪気ヲ除クトイフ。塊根ハ漬物ニ用フ。

[(佐和田) *pil*。(八重山) *piŋ*。(琉球) *firu/çiruu*。(日本) *çiruu*。(薩摩) *çi:çi:ru*。]

pudal-gù: (佐和田)

頭瓜 (*cigul*) ノ最モ大モノヲ瓢ノ如ク乾シ、酒ヲ入レテ畑等ニ持ち行キテ飲ミシモノニシテ例ノ「瓢箪」ノ如シ [(國中)]

(ロシア語の説明あり)

[(西表) *p'idari* = (*ni:bu*)。(石垣) *fudari*。

柄杓。(コハ) *pindari*。(コハ) *m'u:ndari* (瓢ノ上部に小さき孔。大なる柄杓)]

「古事記。雄略記本陀理」秀罇、秀樽。「多理」と云物も古は酒を注ぐ器なり。…古の罇は後世に瓶子銚子などを用る如く用ひなりし器なり。然るに後世には樽は酒を入れ置器となりて注ぐ器には非ず。…多理と云名の義は重に

て其口より酒の重出るとなるべし…
秀とは其口の裏分重きを云ふなるべしや」

(9) 地名・井に関する語彙 (159 語)

abujama (平良) 阿武山。平良町西仲宗根の小字。
ju:raʒi: (平良) 地名。由良瀬。平良町東仲宗根の小字。
tumu:z (平良) 友利。城辺 (gusikubi) 村ノ大字ノ一。(露) ……gusikubi
nišibaru (平良) (西原) 西原。平良村ノ一字ナリ。西村 (nisimura) トモ云フ。明治七年池間島ヨリ移住セシモノニシテ水泳ニ長ジ漁業盛ナリ。言語ハ池間島ト佐良浜村ト同ジト云フ。
(ロシア語の説明あり)

minna (Com) 水納。

多良間島ノ西北三海里許リニアル島ノ名。周囲ハ一里余。人民ハ主ニ漁業ヲ営ム。此ノ島ニハ多良間尋常小学校水納分教所アリ。口碑ニ依レバ往古百合若大臣 (juriwaka-daigjin) ト云フ人ガ鹿兒島へ帰ッテカラ臣下ヲ分ケテ水納島へ追ッタ。其ノ時カラ水納ガ段々ト盛ンニナッタト。

(以下、ロシア語の説明が続く)

ažza:ga: (平良) 藍屋川ノ意カ。平良村字西里ニ在ル井戸ノ名。水ハ塩カラシ。
(ロシア語の説明あり)。

[ažza: 「露」 + ka: 「露」]

junauga: (多良間) 世直河ノ意カ。ナガシガー (井戸ノ名) ノ異名。
(ロシア語の説明あり)。

pay-ga: (平良) 「蛇井」ノ意カ。井戸ノ名。

(10) 自然・歳時に関する語彙 (213 語)

baka-naci (平良・多良間、Peto) 若夏。
[(八重山) baka-naci。(琉球) waka-naci。
(日本) waka-nacu。]
「混効験集」わかなつ wakanaci 四、五月穂

出る頃を云。

ju:zfo:busi/ju:zfazbusi (平良) 宵の明星。

(沖縄) jubammanʒa:/ju:baŋkamibusi。

upura-usagi (平良) 明けの明星。

tim-bay (平良) 虹。「天蛇」の意。

kaiʒiti mudusicika: timbayn-du-makaiz。

[(佐良浜) tinnuha:unaʒi。(佐和田) tim-pay。

(与那国) aminum'a:。(小浜) tinnumimanci。]

[tiŋ // (日) ten+pay // (日) hebi]

usi-mma-p'iki-busi (上地) 「牛馬引星」ノ意。

牽牛星。

[usi // (日) uši 「露」 + mma // (日) mma

「露」 + p'ik'i // (日) çiku 「露」 + pusi //

(日) ho'si 「露」]

nika (平良) 明日ノ晩。今晚。夜 (ju:z) ノ対語。

一日中ノ最モ遅イ時ヲイフノdealカラ今夜トイフコトニナル (宮良)

[(石垣) nikka。(平良) (波照間) nika。(与

那国) niga 今晚。(那覇) ni:ka: 今夜。]

「混効験集」ねか ni:ka。後刻なりねかいまうれ nika imo:ri と云。後刻ござれと云事也。

ama-inau (佐良浜) / **ama-ino:** (平良) 龍巻。

(11) 海に関する語彙 (211 語)

isu (平良) (佐和田) 海ノ磯。

海ノモノヲ取りニ行キシトキ得物ナキコトヲ

isu-pagi ト言ヒ、アルモノヲ isu-fusaz ト云

フ。人ニ対シテ munu ヲ添ヘテ言フ。pagi ト

ハはげおつる (剥落) ナドノはげデないト言

フ意ニ用ヒ、又 fusaz 海幸モノ (im-fusaz-

munu)、山幸人 (jama-fusaz-munu) ナド云

ヒテ幸あるものヲ言フ。ふさはしいナド云フ

ふさニテヨク其ニ叶フ、ト云フヨリ出タルナ

ルベシ [(Tjima)]

(以下、ロシア語の説明が続く「(國仲)」)

isugam-nigaz (佐和田) 磯神願。

字人民団体ヲ以テ行ヒシ祈祷。basinukam-nigaz トモ云ヒタリ。豚ヲ屠リ浜辺又ハ黒浜御嶽ニ祈リシナリ [(國中)]

(以下、ロシア語の説明が続く)

bzi:kun'a: (平良) 河豚。

[(日本) φυνηω/φυγω。魚虎(針千本)。(首里・那覇) bu:ka:。(古仁屋) bukuna:。(名瀬) buna。(糸満・首里・那覇) bu:na:。(国頭村) bi:η。(八重山) b'iruη/b'iri。]

im-ja:zumi (平良) 海守宮(ウミヤモリ)ノ意。水母(クラゲ)

(ロシア語の説明あり)

[im「露」+ja:zumi「露」]

im-nu:ma-gama (佐和田) 海馬(タツノオトシゴ) [im「露」+nu:ma「露」+gama「露」]

(12) 昆虫・虫に関する語彙 (67 語)

aka:z < **aka-az** (平良) (上地) 赤蟻。

(佐良浜) aka:z/akaji。(八重山) aka:l。(日本) aka-ari。

m'a:rabi-nu-tamasī (佐良浜) 「乙女ノ靈魂」ノ意。虫ノ名。

(ロシア語の説明あり)

bi:z (平良) 蜻蛉。

[(佐良浜) b'u:sum。(佐久間) ake-beru 赤蜻蛉。(肥後) hembo。(佐賀) hebo/bembo:。(佐渡) damburi。]

ja:mbu (平良) 螢。暗火(ヤミホ)の意か。

pabira (平良、Poet) 蝶々。

あけず舞をはへら舞をさおとれ。

akizī-maiju pabira-maiju

pavgata (平良) くつわむし。(Miyara)

(13) 鳥に関する語彙 (46 語)

aka-b'a (上地) 赤鳶ノ意。鳶ノ一種。

baso:duz (上地) 芭蕉鳥(鳥ノ一種)。

[baso:// (日) bašo:「露」+tuz// (日) tori

「露」]

ka:tuz (平良) 皮鳥ノ意。蝙蝠。

[ka:// (日) kawa「露」+tu:z// (日) tori「露」 (八重山) kaburī。

nu:kubiz (平良) (Miyara) 水鶏(クイナ)。

o:ča:nutuz (平良) 闘鶏鳥(シャモ)。

(八重山) aitča:rītūrī。

vsi:funak'ituzgama (平良) 鶺鴒。

[(多良間) śi:funage:。(八重山) zu:φunaja:。]

「和名抄」迹波久奈布利。久奈敷搔也(笠注倭名数聚抄七ノ三十ウ)。

「俚言集覽」(増)かはらしこなき出羽にて鶺鴒を云。

(14) 動物に関する語彙 (45 語)

aka-tukara (平良) 赤棟蛇(ヤマカガシ)

(露) うはばみ。

[(八重山) tukara-pabu。(石垣) akatukara。ヤマカガシ。(小浜) tako:ra。(新城) to:rabau。(西表) tukarapabu。(琉球) aka-tukara。]

[aka// (日) aka「露」]

gar'asa-bav (平良) (上地) (伊良部) 鳥蛇。黒色ノ小蛇。毒ナシ。

[garasa「露」+pav (日) hebi「露」]

[(琉球) garasi-φi:ba:。(糸満) garaši-si:ba:。

(名護) garaši-p'a:ha:。(波照間) garasa-paku。(西表) garaši-si:ba:。(黒島) garas'i-paη。(新城) garas'i-bau。(オタ) garas'i-bi。]

unta (佐和田) (佐良浜) (池間) 蛙。[露]

[(平良) manata。(石垣) (コハ) (与那国)

auda。(新城) auta。(西表) abuta:。(与那国)

ata-çlta。(嘉手納) ata-bi:。(糸満) attabika:。

(名護) (嘉手納) (首里) (那覇) atabiča:。(与論)

ata-biku。(徳之島) a:tara/atara。(名瀬)

bikki。(笠利) (ヤマト) (古仁屋) (オセ) (永良部)

biki。(日) siki-gaeru。]

ki:battuz (佐良浜) 蝙蝠。

[ki: // (日) ki「露」+ba:z // (日) waru「露」
+tu:z // (日) tori「露」]

jama-amami (平良) とかげ。

o:na:zi (保良) / **o:na:zi** (平良) 黄領蛇 (アオダ
イショウ)。

(狩俣) o:na:zi 虹。(佐和田) au:-na:zi。(多
良間) o:nu:zi/o:nu:zi-po:。(上地) wa-na:zi。
(八重山) au na:zi。(琉球) o:nna:zi/ o:nna:za。
(岩手) (青森) ao-no'ras'si。

(15) 植物に関する語彙 (121 語)

※を付して和名を付け加えた。

ffanća (佐良浜) 草ノ名。※秋のわすれ草。

gazi-na (佐和田) ※ヘンリーメヒシバ

山野ニ自生ス。針葉草ニシテ牛馬ノ飼料ニ用
フ [(國中)]

jumunu-nu-muzi (佐和田) 「鼠ノ麦」ノ意。草
ノ名。山羊に与フ。

kassa/kassa-ba: (Com) 植物ノ大ナル葉 (芭
蕉ヤ不食芋等ノ葉)

此ノ葉ヲ以テ食物ヲ蔽ヒ、或ハ食物ノ下ヘ敷
クニ用イル。此ノ習慣ハ八重山群島ニモアル。
ソコデハ之ヲ kasanupa:ト云フ。宮良當壯君
ノ説ニ依ルト (國學院雑誌、大正十二年七月号
六十四夏) 此ノ kasanupa:トイフ語ハ「炊ノ
葉」ノ義デ.....国語デモ柏「カシハ」ト呼ブ
ノハ、古代ニ於テコレト同ジ風習ガ存ジタカ
ラデアロウ。古事記ニモ膳夫 (カシハデ) ト見
エテイルト云フ。

(琉球) ka:sija。(琉球) ka:sa。

upugassa fta:tca: no:ga (平良) 大葉は何
(tin tu zi 天と地)

imgumpo: (平良) あざみ。

n'a:zici (佐和田) / **na:zici** (池間) (佐良浜) 植
物ノ名。むらさきかたばみ。

(16) 樹木に関する語彙 (126 語)

※を付して和名を付け加えた。

ako:gi (:) (平良) 赤榕樹。

伊良部島ニテハ魔ノ宿ル木トテ此ノ木ノアル
所ヲ嫌フ。

[(佐和田) ak^o augi:。(八重山) ako:g i:/
ako:ki:。(与那国) akoki。(石垣) ako。(琉球)
ako:gi。(首里) (那覇) ušku。(糸満) usuku。
(日本・大隅) akoki。(日本・土佐)。akogi。]

fuzizgi (伊良部-仲地) 樹木ノ名。※オオムラサ
キシキブ

paygi: (平良) 楮。

gigici/gigici-g i: (Com) 月橘。

堅材ナレバ印材ニ用ヒ又干瀬がら (psigara)
トテ金棒ノ代ニ婦女子ガ白鳥干瀬ニ携ヘ行キ
暗礁ヲ碎キテ魚貝ヲ捕ル具ヲモ造ル。其ノ葉
ハ子供ノ玩具トシテ相撲取ノ真似ヲ為サシム
ルニ用フ。黄楊ニ似タル樹ナリ [(國中)]

(以下、ロシア語の説明が続く)

[(琉球) gigici/gikizi。(日本) gekkicu。(小
湊) dikišigi。(ヤマト) dikisigi。(名瀬)
gecugoaugi。]

ma:ni (平良) (佐和田) 山棕。櫻。黒次 (クロツ
グ)。樹木ノ名。

伊良部島ニテハ其ノ莖ヲ包メル毛ニテ縷ヒタル
ヲ ffukara-gina ト称シ、若葉ニテ縷ヒタル
ヲ p^s inil-gina ト称ス。枝ヲ重ネテ括リ手綱
ヲツケテ子供ヲ乗セ引歩クヲ sa:bici ト云フ。
[(國中)]

(以下、ロシア語の説明が続く)

[(石垣) (琉球) ma:ni。(古仁屋) mani。(与
那国) ban' i。]

(17) 身体に関する語彙 (207 語)

ヤロシュさんの報告では182語であるが、28
語を追加した。

身体および医療に関する語彙の中には重複語彙
が31語ある。

mi:pana (平良) (佐和田) (佐良浜) 「目鼻」ノ意。
顔。

(露) 文字通り「目鼻」の意。すなわち顔、外見。
[mi:// (日) 目 (露) 「目」+pana // (日) 鼻
(露) 「鼻」]

mipana ffo:fu sítti mmu ffait'a:nnu
muno: no:ga (平良)

顔を 真っ黒にして 芋を 食うばかりのも
のは 何 (muribaŋ) 黒板

jkata-buni (佐和田) (佐良浜) 肋骨。(露) 肋骨。

ju-sípaz (平良) 尿。小便。(露) 尿。小便。

ju-sípazzu-si 小便する。(露) 小便する。
adzaŋkai Jusípazzu asimti uribadu
<ちょうど道の脇で小便していたら>
přitunu mainj jusípaz sí te:ka uzso:
no:ga

人の 前に 小便してばかり しているのは
何か (c':uyka (露) 急須)

(佐和田) ju-sibal。(露) 「夜の尿」(子供のよ
うに、夜に寝床に小便をもらすこと)。

[(八重山) síbari。(小浜) íspe:。(石垣) ju:
síbari 寝小便。(新城) jusubai。(露) 「尿」。

(琉球) sibaji。(首里) (那覇) jusubari。(日
本) jubari/jumari。]

kuŋk'aba: (平良) 八重歯。(露) 八重歯。

(18) 医療に関する語彙 (206 語)

ロシア語の翻刻はヤロシユさんの報告から引
用した。(露) で示した。ヤロシユさんの報告で
は 188 語であるが、13 語を追加した。

nabani/naban'a: (平良) 黴毒。梅毒。(露) 黴
毒。梅毒。

(露) 平良、そして宮古本島全体では梅毒に
かかった際、毒を「外へ出すために」病人に
山羊 (pinza) の肉を食べさせる。病人の体中
が腫瘍や腫物に覆われそれらが乾燥しはじめ
たら、犬の肉を食べさせる。

(琉球) nabaŋ-kasa/na:baru。nabaŋ 南
蛮。(日本古語) nabaru

(露) 「身を隠し姿を見せないようにする」、
「誰にも見られないように身を隠す」

[(波照間) nabata。(首里) (那覇) (屋良)
na:baru。(老岐) namba。(名瀬) (住用) (伊
須) (古仁屋) (実久) (喜界) (伊仙) nabaŋ。
(名護) nabaraï-gasa。(与論) nabaru。(魚
目) (肥前) (南松浦) nambagassa。(種子島)
nabaŋ。]

z-gasa (平良) 麻疹。(露) 麻疹。

(露) ある子供が麻疹にかかった場合、すぐ
かからせてもらおうと近所の人が自分の子供
もそんな家に行かせる。病人を家の裏にある
静かな部屋に移す。麦類や脂っこい料理は食
べさせなく、薬として žibira-ju:という žibira
(玉ねぎの一種) のつゆを飲ませる。子供を楽
しませるために両親は何らかの楽器を奏でる
ことがある。

[(琉球) (糸満) iri-gasa:。(屋良) iri-gasa。]

jaci-yŋa (佐和田) 艾。灸スルニ用イ、鶏肉等ト
煮テ食ス。宅地ノ空地ニ生ズ。其ノ乾葉ハ汁
ニ入レテ食スレバ邪気ヲ除クトイフ [(國中)]

(露) ヨモギ。民間治療においてやいとして
使われる (これはロシアの吸玉療法に多少似て
いる)。そのほか鶏肉などと煮込んで食べられ
る。[jaci // (日) jaku (露) 「焼く」+fusa //
(日) kusa (露) 「草」]

[(八重山) jatcufuci。艾。やいと達の義。(肥
後) ja:to/ja:cu/jato:。灸。]

kuŋk'a: (平良) 頼病患者。(露) ハンセン病にか
かった人。ハンセン病に患う者。

[(琉球) kunc'a:。(露) ハンセン病者。(露)
ハンセン病。(石垣) kuŋk'a:。(与那国)
kumuda:。(名護) kuŋk'a:。(首里、那覇、屋
良) kumuŋa:。(糸満、黒島) kumuga:。(名瀬、
徳之島、伊仙) kumugi。]

in (Com) 犬。この言葉を時々悪口として使う
(露) 犬 (悪口として使われる時もある)。

(露) 上地では、老犬は物の怪になり、ヤドカ
リの貝 (amamgu) などを靴として履いている
と言われている。

上地では、しつけを3日間されていた犬は3
か月間飼い主に忠実で、そしてしつけを3か
月受けていた犬は1年間ばかり飼い主の家に
いると言われている。

犬の肉を梅毒 (naban'a) にかかった時に食
べる習慣がある。

[(琉球、八重山、能登、佐賀) in。 (日本) inu。]

(19) 玩具。遊びに関する語彙 (35 語)

gunʒa/gunʒa-juz/gusik'a (ミヤ) (宮良) 脊
負 (おんぶ)。

kŋg'a: (池間) 脊負 (おんぶ)。

kù:ru (平良) (佐和田) 独楽。

子供ノ廻ハス玩具。円周ハ九寸ノ木片。其ノ
遊ヲ **kù:ru-kaisi** ト云フ。 **kù:ru** ヲ打ツ木 (長
サ三尺位ノ棍棒) ヲ **kù:rugi:** ト云フ [(國中)]
(石垣) ko:ro:。(宮良) ʒi-ku:ru。(名護) go:ru:。

(古仁屋) (伊須) (住用) (実久) ko:ri。(名瀬)
kuru。(永良部) (与論) ku:ru。(嘉手納) (首
里) (那覇) (糸満) ku:ru:。

ittugajo: (?) 女兒ノ遊戯ノ名。弾碁 (ハジキ)。

(八重山) ttugajo:。

pabi:z (平良) 蝶々ノ意ナレドモ現代ハ子供が凧
をあげる時、糸に小さき紙片を通す。その紙
片、風の力にて次第に凧に近付く。その紙片
を **pabi:z** といふ。

(以下、ロシア語の説明がある)

[(佐和田) pabil。(佐良浜) pabi:z/pabil。

(多良間) pabiru。(八重山) pabiru。(琉球)

haberu/hʔhaberu。(Wnna) ha:be:ru。(金
武) ʔa be:ru。(名護) ha be:ru。(奄美大島)

habera。]

ujamma-sadur'a (ミヤ) (宮良) 肩車。

(20) 性格等に関する語彙 (94 語)

bub'a:ra (平良) 人の意見にさからふもの。

jaduff'a: (平良) 社交的でないもの。ウチコモリ。
ケチンボ。

jamagu (平良) (佐良浜)

jamagu-munu (佐和田) (佐良浜) 悪人又ハ狡猾
ナル者。山かん。

[(石垣) (コハ) jamangu。(与那国) damangu。

(波照間) jamagu-munu。(平良) kećimbo。
= (露)]

munu jum'a (平良) おしゃべり。饒舌家。

(21) 学問等に関する語彙 (26 語)

idʒaz-mùnù (佐良浜) 好ク働ク人。ヨク勉強ス
人。

iʒi-munu (佐和田) 勉強家。

nuribaŋ (平良) 黒板。

nara:sĩ (平良) (上地) (多良間) 教える。

śukudai (平良) (佐和田) 机。畳ノ上ニ据エテ字
ヲ書キ本ヲ読ムニ用ヒタリ [(國中)]

(22) 職業等に関する語彙 (25 語)

na:bi-nu-ku: (平良) 「鍋ノ工」ノ意。鑄匠。

(八重山) na:binuku: 鍋の破孔を塞ぐこと。

ak'a:da (平良) (平良 nakaŋai)

ak'inai-p'itu (平良) 商人。

[(八重山) ak'inai-p'itu。(琉球) aćiné:nću。

(日本) akindo/ak'u:do<aki-bito。]

mma-baku (平良) 博労。馬喰。(日本) bakuro:。

muci-zajafu (平良) 塗工。左官。

(23) 人名に関する語彙 (64 語)

itukaʒi-anʒi (平良) 糸数按司 (歴史的ノ按司ノ
名)

ju:sĩmanuśu: (狩俣) 四島の主。

mivvamu:z (平良) 目黒盛。

sura-bzzu (平良) 空廣。仲宗根豊見親玄雅ノ童名。

kamado-gama (平良) 女子ノ名。

kamado-gani (佐和田) 男子ノ名。

以上、23項目に分類できたのは収録語彙のうち3500語余である。ここでは23項目に分類できなかった語彙について分析を試みる。

(1) 動詞710語、形容詞162語、副詞85語、助詞・接続詞・代名詞・感動詞など227語の語彙がある。

(2) 他に数詞に関する語彙99語、色に関する語彙13語、人称に関する語彙21語などがある。

(3) それ以外の語彙が429語ある。例えば、**ada** (平良) 徒。無効。**baŋ** (平良) 番。**butu:zza:** (平良) 劇場。**igaŋ-gui** (佐良浜) 遺言。**junu:l** (多良間) 同折。丁度一か年後ノコト。**gukuraku** (佐和田) 極楽。**irai** (平良) (上地) (島尻) 応答。などがある。そのうち、訳語の示されていない語彙が42語、ロシア語の訳語のある語彙が149語ある。分類可能な語彙もあるだろうが、訳語が示されていないので語彙数にとどめた。

次に、収録語彙の内容について分析してみた。

(1) 分類した23項目には[Com] (一般・共通)に関する語彙が196語ある。そのうち歴史が11、民俗が5、機織が4、地名が9、農具が9、飲食が6、自然が8、海が4、樹木が8、家屋が10、親族が11、身体が10、などである。

他に数詞20語、動詞8語、人称5語、助詞・接続詞・感動詞など33語、である。

(2) 23項目には[Poet] (歌謡語)に関する語彙が177語ある。そのうち、地域名の付されていない語彙が37語ある。地域名が付されている語彙は、平良73、狩俣12、島尻4、西原7、池間2、下地2、伊良部3、伊良部-仲地1、国仲

1、長浜1、佐和田10、佐良浜3、多良間18およびCom3、の計140語である。

(3) 地域名の付されていない語彙が91語ある。例えば、**arasi** とぐ。**zitu** 地頭。**kučabaŋ** 飯茶碗。**maifuga** 利口者。**maja:si** 投ル(?)。**kisa:gata** 以前。**tiganaz** 手伝う。などである。

(4) 見出し語における重複語彙が21語ある。例えば、**arauni** (狩俣、Poet) 新船。**a:sa** (佐和田) 石蓐 (アオサ)。**bikiga:ra** (平良) (上地) 牡瓦。**ma:gu** (平良) (佐和田) (佐良浜) (西原) 円形の籠。**ta:ragu** (佐和田) 俵の皮。などである。

(5) 謎々が平良と上地から20例収録されている。例えば、

mi:nu mi:cī pa:nu fta:cī az muno: no:ga
(平良)

目の3つ 歯の2つの有するものは何か (atca 下駄)

baŋ sadara baŋ sadara ti uz munua no: (上地)

私が先 私が先 といっている者は何 (gušaŋ 杖)

4、同じ音声の語彙

宮古方言は、①宮古本島方言、②伊良部島方言、③多良間島方言、④池間島方言、⑤大神島方言に体系化されている。宮古本島方言はさらに平良方言、狩俣方言、下地方言、城辺方言、来間島方言がある⁽⁴⁵⁾。

方言語彙の視点から見てみよう。語彙の収録が最も多い平良地区を中心に見れば、平良方言と同音の語彙が908語ある。その中で最も多いのは、伊良部地域の佐和田で400語もある。全体のおよそ4.5割を占めている。ついで佐良浜が130語、伊良部が33語、仲地が3語、国仲が4語、長浜が2語である。伊良部地域だけで全体の6割を越えている。

平良地域では狩俣が48語、島尻が29語、池

間が12語である。下地地域の上地が126語である。多良間地域の多良間は84語、水納は12語である。下地地域の上地が最も多い。

これらの同音語彙の内訳から考えられるのは、100年前の宮古ではほとんどの地域で、多くの方言語彙が平良方言と同じ音声であったことが窺える。宮古方言の体系図からすれば別々の音声言語と思われるのだが、同じ音声の語彙が多いということは、平良の住民と他地域の住民との交流が頻繁であったという背景があったのだろうか。

100年前といえば、「琉球処分」(1879)から40年余しか経ていない。他地域との住民間の交流はまだ極めて薄かったと思われる。近代社会の以前でいえば、他地域との住民間の交流は厳に制限されていた社会である。特に伊良部地域には海を渡るという行動が伴うにもかかわらず、平良方言と同じ音声の語彙が伊良部地域で578語(64.9%)も収録されているのは、どのような理由によるのだろうか。伊良部は特徴的な地域であろうか。

おわりに

『宮古方言ノート』の内容について見てきたが、ネフスキーは幅広い視点から宮古の方言語彙を収集していることが読み取れる。さらに語彙の説明にも細かい配慮がなされていて、利用する者を大いに助けている。

もし、ネフスキーが宮古島を研究の地として選択していなければ、私たちは、いわゆる『宮古方言ノート』を今日手にすることはなかった。このことを思えば、民族・言語学者ネフスキーの果たした役割ははかり知れないものがある。これは研究者の一致した見解でもある。

最後にネフスキーはどうして、宮古島を研究の地に選んだのかを考えてみることで、この稿を終えることにする。

《なぜ宮古島なのか》

ネフスキーはどうして、宮古島を研究の地に選んだのか。研究者の多くが発した問いかけでもある。宮古人としてはとても気になる大事な問いかけである。宮古島にやって来たネフスキーに感謝の気持ちを伝えたい。

加藤九祚は、「ネフスキーがいかなるいきさつから沖縄、しかもその先島である宮古群島に注目したかは正確には不明である。いずれにしても柳田国男や折口信夫、さらには沖縄出身の東恩納寛惇や伊波普猷らの影響によることは疑いのないところであろう。」⁽⁴⁶⁾と述べている。

この見解に異論をさしはさむ余地はない。ただ、果たしてこれだけでいいのだろうかという思いが頭をよぎる。

グロムコフスカヤ女史は、「それはたぶん〈神話創造の中心〉の一貫した探求のなかで、宮古は探求者にとって、この意味における〈約束の地〉だからであるだろう。そこ[宮古]には巫女-ノローを長とする独特な宗教儀式の諸要素、さらに言語、民俗、祭礼、祭式においてもその地域特有なものが残っている。」⁽⁴⁷⁾と述べている。

田中水絵は、「日本で失われた信仰や風習を伝えるアヤゴ」「それらは〈日本民族の起源に(少なくとも古代史に)光を当てること〉を目指して〈神話創造の中心の探求〉を続ける民族学者ネフスキーを魅了した。」⁽⁴⁸⁾と述べている。

両者の考えは、ネフスキーは宮古島に来島する以前から、「神話創造の世界」が宮古島にあることを認識していたとの理解であろう。柳田国男や折口信夫らの影響があったのだろうか。このことについては、否定も肯定もしかねる。宮古島についてネフスキーの事前学習がいかほどのものであったかを知ることができないから。

《宮古方言の研究》

ネフスキーはいつごろから宮古方言に関心を

抱くようになったのであろうか。

「1919年、小樽高[等]商[学校]に赴任して後のネフスキーの学問的興味は、日本民俗学だけではなく、アイヌ語、ついで宮古島方言の研究にまでひろがっていった。」⁽⁴⁹⁾ ようである。

田中水絵によれば、ドイツ人アルブレヒト・ウィルト(1866~1936)は、1900年に「新琉球諸方言」を発表した。方言数は、八重山が53、宮古が142、本島の山原が53、本島南端が109、[奄美]大島が130。その中で宮古方言が最多である。ウィルトは日本語ハ行の古音Pなどの音韻に着目し、(極めて独特な宮古方言)と記している。ウィルトは外国人で最も早く宮古方言に注目し、最も多くの宮古方言を記録した⁽⁵⁰⁾。

1897(明治30)年頃に沖縄を訪れ1か月ばかり滞在したウィルトは、宮古方言と八重山方言を「首里で複数の中学生から聞き取った」⁽⁵¹⁾という。富盛寛卓はその2年前に沖縄県尋常中学校を卒業している。その頃、尋常中学校に在学していた宮古出身者は確認できない。首里の沖縄師範学校には複数名の宮古出身者が在学していた。ウィルトは師範学校の生徒から聞き取ったのであろうか。

サントペテルブルグ大学の先輩エフゲニー・ポリワノフは、論文「日琉比較音韻論」を1914年に発表した。ウィルトが集めた宮古方言に着目、特に日本語のハ行子音の古音Pを保つ言葉に着目、(P。宮古島言葉は最も保守的であって、其処ではPが保存された)と論じた。ポリワノフは論文の抜冊をネフスキーに贈った。しかし献辞の日付が滲み、1914年12月か1917年12月か判読できないという⁽⁵²⁾。

1915年、2か年の官費留学生として日本に留学していたネフスキーは、少なくとも1917年にはポリワノフの論文を手にして見られている。

「日本の古い信仰を探していたネフスキーは、

先輩が示した日本語の古音が保存されている宮古島に、言語面から新たな研究の場の可能性を見出したのではないだろうか。」⁽⁵³⁾と、田中はポリワノフの論文を手にしたネフスキーの思いを汲み取っている。

ネフスキーは留学生としての期限が迫っていたが、故国では「ロシア革命」(1917年3月)が起ったのでネフスキーは帰国を断念したという。この歴史的な出来事は、ネフスキーを宮古島へ旅立させる遠因になったと見ることもできる。その頃、ネフスキーはアイヌ語と宮古島方言を研究していた、という。

1921年末から翌22年初頭にかけて小樽から東京にきていたネフスキーは、1921年に復学した宮古島生まれの東京高等師範学校の学生、上運天(後、稲村に改姓)賢敷(27歳)から宮古島の方言を1週間学んでいる⁽⁵⁴⁾。上運天はネフスキーより2年後輩にあたる。

ネフスキーは、宮古島の方言を学んだあと高木誠一に「言語学上にしろ土俗学上にしろ」材料の多い国[島]だと思ふ⁽⁵⁵⁾、と感想を述べている。ネフスキーには「日本の古語・古俗は列島の縁辺部に残っている」という一貫した考え方があった⁽⁵⁶⁾。

《宮良當壮との出会い》

ネフスキーは、八重山出身の言語学者宮良當壮とどのような関係にあったのだろうか。その出会いを見てみよう。

ネフスキー(29歳)が、初めて宮良當壮(28歳)に出会ったのは、1921(大正10)年の3月のことである。言語学者金田一京助らに認められ方言研究に没頭しているころである。

宮良が折口[信夫]先生宅を訪問すると、柳田[国男]先生、金田一[京助]先生、岡村さん、羽田さん、それにロシア人のネフスキーが居られた。柳田先生は早速ネフスキーを紹介して下さった。折口先生が御酒を出されたので、ネフ

スキーは「サ、宮良君！」と盃をすすめられた。宮良は八重山の歌を2、3曲歌って講釈をつけた⁽⁵⁷⁾。

翌4月、宮良は神田の初谷旅館にネフスキーを訪ね、言語学上の問題について語りあった。理解が未だ充分ではなかったのか、露国大使館附日本新聞翻訳官の言語学者オレスト・プレトネル氏を呼び出して、3人で例の問題を討議した。宮良は午前9時に訪問して午後10時に帰宅した⁽⁵⁸⁾。

半日も費やし言語の問題について議論を重ねたことになる。どのような言語の問題であったのかは触れられていない。

ネフスキーは宮良と言語学上の討議のあと、宮古方言により一層関心を抱き、宮古島に行くことを考えたのではないだろうか。その年の年末正月休みには宮古島の上運天賢敷から一週間ばかり宮古方言を習っていることは前述の通りである。

ネフスキーが宮古島を研究の地として最終的に選択したのは、宮良との出会いが直接的な契機になったのではないだろうか。

田中は、ネフスキーが柳田に宛てた手紙から「宮古諸島のフィールドワークの必要性和助力を訴えているのではないかと推察し、その「背景に柳田ら学者に資金面も含め様々な支援を受けて八重山研究を進めているネイティブの研究者・宮良當壯への羨望があったのではないかと」⁽⁵⁹⁾と考察している。

アイヌ語と宮古方言を研究していたネフスキーにとって「日本の北方と南方とはいかにも結びつかないようであるが、ネフスキーの中ではそれは一貫していた。すなわち日本の古語・古俗は列島の縁辺部に残っているという考え方である。」⁽⁶⁰⁾

生田美智子もネフスキーが「アイヌと宮古島という日本の北端と南端を研究したのは、変化

を受けやすい中心ではなく、周辺部に残る日本文化の古層をほりあてるのが目的であった」⁽⁶¹⁾と述べている。

列島の縁辺部あるいは周辺部の南端といえば、地理的には宮古の南に位置する八重山である。にもかかわらず、ネフスキーは何故、八重山を選択しなかったのだろうか。八重山方言ではなくして何故宮古方言であったのか。ポリワノフの論文も多少なりとも関係しているのだろうか。ネフスキーはウィルトやポリワノフが指摘した「極めて独特な宮古方言」古音Pの音韻に注目したのかもしれない。

3回目の宮古訪問の翌年、1929年に帰国したネフスキーは論文「音素P考」を発表した。しかし、執筆年は不明だといふ⁽⁶²⁾。

狩俣繁久は、「当時は、沖縄では伊波普猷が、八重山では宮良當壯が、それぞれの地で研究を行っていたことや、宮古がこれまでに本格的な研究がなされていなかったことも影響したのではないかと指摘している」⁽⁶³⁾。

田中水絵は、大学の先輩ポリワノフの論文「日本語・琉球語音声比較概論」([日琉音韻比較論])は「沖縄本島以外の方言についてはほとんど触れていない。その中からネフスキーが宮古方言を選んだことには、當壯の存在が大きく関わっていたと思われる」と指摘している⁽⁶⁴⁾。

狩俣や田中が指摘しているように、ネフスキーが宮古方言を調査の対象にしたのは、八重山出身の言語学者宮良當壯の存在は見過ごすことは出来ないであろう。

《宮古島訪問》

ネフスキーは、宮古島訪問に際して音声学上の不足点、動詞の活用変化、「てにをは」の使い方などを究めることも目的にしたようである⁽⁶⁵⁾。

ネフスキーは1922(大正11)年4月、大阪外国語学校に転勤した。ネフスキーは上運天賢敷

を宮古島への案内役として頼み、大阪の自宅2階に1週間宿泊させて、宮古方言の学習に力を注いでいる⁽⁶⁶⁾。

1922年7月、夏休みを利用した1度目の宮古島訪問となった。ネフスキー30歳の年である。八重山の宮良當壯と出会い言語学上の論議をしてから1年余である。

グロムコフスカヤは「ネフスキーが何事であれずるずるのばしにすることが嫌いなことをしていれば、1922年、機会ができるとすぐに、現地で資料を収集するために、はるばる宮古島へ出かけたとしても驚くにあたらない。」⁽⁶⁷⁾とネフスキーの一途な性格を述べている。

ネフスキーは用意周到な準備を経て、初の宮古島調査となった。伊良部村長の國仲寛徒(当時49歳)との出会いは、ネフスキーの調査・研究を大いに手助けすることになった。その後、26(大正15)年、28(昭和3)年と3度も宮古島を訪れ、宮古方言語彙をアルファベット順に書いた「宮古諸島の語彙研究のための資料集」を残した。この貴重な資料が今日異彩を放っているのは先述した通りである。

ネフスキーは2度目の宮古島訪問で、慶世村恒任と出会っている。慶世村はネフスキーより1つ年上である。ネフスキーは宮古島に伝わる「アカリヤニザガマ」の伝説を慶世村から聞いている。ネフスキーはこの伝説をとりいれた論文「月と不死」を1928(昭和3)年『民族』(第3巻2号、4号)に発表した⁽⁶⁸⁾。

慶世村はネフスキーに出会った7か月後の27(昭和2)年2月、『宮古史伝』を刊行した。その「自序」に「独りエヌ・ア・ネフスキー氏は近年一再ならず宮古島に渡り実地について其の民俗言語を研究せられ、臆て結果を公にしやうとして居られることは斯学界の為め欣幸に堪えぬ次第である。」と述べている⁽⁶⁹⁾。

ネフスキーの言語調査の影響を受けたのであ

ろうか。『宮古史伝』には地名、人名、民俗など33の語彙に音声表記が記されている。例えば、宮古(myaku)、豊見親(tuyumya)、三叉ウギヤ(mizumata vgya)、初立(uvdatu)などである。ただし、音声表記の「j」は「y」で、「z」は「zu」で、表記されている。

『宮古方言ノート』にはロシア語で説明している語彙が随所に見られる。どのような説明がなされているのか非常に興味深い。先述したヤロシュさんの報告では、その一部が翻刻されている。例えば、医療語彙の「iq」(犬)、「nabani」(梅毒)、「kusik'a」(嚏)、「z-gasa」(麻疹)、「zza:」(胎盤)などである。

ロシア語による宮古方言の語彙の説明は『方言ノート』の広がりとその価値を一層高めていることは言うまでもない。ロシア語の翻刻を収めた活字本が市民の手に触れることを期待したい。

[付記] 2022年はネフスキー来島100年、生誕130年の節目の年であった。2022ネフスキー記念文集編纂委員会(代表宮川耕次)は、『ニコライ・A・ネフスキー生誕130年・来島100年記念文集 子ぬ方星』を2022年12月に発刊した。

[注]

- (1) 1926年「アヤゴの研究二編」(『民族』第1巻3号)。「アヤゴの研究」(『民族』第2巻1号)。1927年「美人の生まれぬわけ」(『民族』第2巻2号)。「宮古島子供遊戯資料」(『民族』第2巻4号)。1928年「月と不死」(『民族』第3巻2号・4号)。1923年「宮古島の結婚と祭礼」について京都大学史学研究会で講演。小川琢治による抄録が『地球』第1巻第3号(大正13年)に掲載される。抄録の全文は『完本 天の蛇』(2011)

- に収録されている (142~147 頁)。
- (2) 加藤九祚『完本 天の蛇—ニコライ・ネフスキーの生涯』(河出書房新社、2011 年、初版 1976 年) 149 頁。
- (3) 田中水絵『歌の島・宮古のネフスキー』(ポーターインク、2022 年) 61 頁。
7 月 26 日消印の絵葉書を購入した田中は「折口信夫宛ての絵葉書に書いたとおり 7 月 27 日に那覇港を出港したならば、」と前提がつくが、宮古到着を 7 月 28 日と想定している。
- (4) 注 (2) 前掲書、132~133 頁。
「私が郷土の民俗文化研究にこころざしたのは、このときのネフスキーとの出会いと無関係でないと思う」と後に下地 [馨] は語っている。133 頁。
下地馨は 1970 年ネフスキーの遺児ネリ (エレナ) と親交のある児童文学者田中かな子の来訪を受け、ネフスキーのその後の消息を知った。下地馨は 1973 年のソ連教育視察団に加わり、モスクワ、レニングラード、キエフを訪れた。このときレニングラードで案内役の田中かな子といっしょにネリ (エレナ) を訪れたとのことである。133~134 頁。
下地馨は 1975 年『宮古の民俗文化』を著わした。その時ソ連で写された写真が掲載されている。①ネフスキーの娘エレナ・ネフスカヤ女史と。②宮古民俗を研究しているレーニン大学教授のリジャ・グロムコフスカヤ女史と。③レーニン像前で案内役の田中かな子女史ら 2 人と。
- (5) 注 (2) 前掲書、133 頁。
- (6) 宮古島市史資料 4『郷土史』(宮古島市教育委員会、2012 年)。同資料 4 は謄写版刷り陰影と翻刻文で構成されている。
- (7) ニコライ・A・ネフスキー『宮古方言ノート』複写本(上) (平良市教育委員会、2005 年) 90 頁。
- (8) ネフスキー著、グロムコフスカヤ編『宮古のフォークロア』(1978)。狩俣繁久・渡久山由紀子・高江洲頼子・玉城政美・濱川真砂・支倉隆子ら 5 名が共訳 (砂子書房、1998 年)。274、276、278、278、290、290 頁。
- (9) 注 (2) 前掲書、134~135 頁。
稲村は伊良部島には同行しなかった。
- (10) 注 (2) 前掲書、136 頁。
乗瀬御嶽の伝説や祭事は 1923 年に発表した「宮古島の結婚と祭礼」に記載されている。145~146 頁。
- (11) 注 (2) 前掲書、136 頁。
- (12) 注 (2) 前掲書、139 頁。
- (13) 注 (3) 前掲書、145 頁。佐良浜の滞在論文「(宮古の) 病気治療」143~148 頁。
- (14) 注 (7) 前掲書、153 頁
- (15) 注 (3) 前掲書、72 頁。前泊金吉
- (16) 注 (2) 前掲書、142 頁。
その成果は翌 23 年 2 月、京都大学史学研究会で「宮古島の結婚と祭礼」と題して講演した。小川琢治によって講演内容の抄録が雑誌『地球』(1924) に発表された。『完本 天の蛇』に再録されている。142~147 頁。
- (17) 注 (8) 前掲書、112、178、264、266、272、274、292 頁。
- (18) 注 (8) 前掲書、170 頁。
- (19) 岡正雄編『月と不死』(平凡社東洋文庫、1990 年。初版は 1971 年)。68 頁。
[ネフスキーが] 伊良部島から戻ると再び稲村が案内をつとめ、郷土史にくわしい人びとを紹介した。ネフスキーは稲村宅にも数度訪れた。(『完本 天の蛇』147 頁)
- (20) 注 (8) 前掲書、152 頁。
注 (19) 前掲書、46 頁。アヤゴの (原文) と (訳) が掲載されている。43~46 頁。
- (21) 注 (8) 前掲書、264 頁。
- (22) 注 (19) 前掲書、68 頁。
- (23) 注 (19) 前掲書、14 頁。

(24) 注(19) 前掲書、13頁。

[若水の]「類似した伝説を大正11年夏、故富盛寛卓氏より聞いたことがある。」

(25) 注(8) 前掲書、132頁。

(26) 注(8) 前掲書、198頁。

(27) 注(8) 前掲書、226頁。

(28) 注(7) 前掲書、91頁。

(29) 注(8) 前掲書、126頁。

(30) 注(3) 前掲書、99頁。

(31) 注(19) 前掲書、32頁。

(32) 注(19) 前掲書、32頁。

注(2) 前掲書、151頁。

三島良章は校長とあるが、久松小学校では訓導1923年多良間小学校に校長として転任した。

野崎村への途中、白川氏根間家の古い墓を見る。ネフスキーは慶世村から「美人の生れぬわけ」の話聞いた。この話は『月と不死』『天の蛇』の両書に掲載されている。

(33) 注(8) 前掲書、180頁。

(34) 注(19) 前掲書、11頁。

注(2) 前掲書、155頁。

(35) 注(3) 前掲書、109頁。

(36) 注(8) 前掲書、353頁。

(37) 注(8) 前掲書、353～355頁。

注(3) 前掲書、109頁。

(38) 注(3) 前掲書、111頁。

〈拝啓先日は御多忙中にも拘はらず御面会下さいまして、誠にありがとうございます。

(中略) 尚ほご依頼の神祈りの文句、民謡、謎の調は小生が引受けて、御報知申し上げます)

(39) 注(8) 前掲書、326頁。

(40) 注(3) 前掲書、76頁。

論文「神酒」は注(3) 前掲書、149～155頁。

(41) 注(19) 前掲書、311頁。

注(2) 前掲書、164頁。

(42) 注(8) 前掲書、276頁、292頁。

(43) 山下邦雄編『國仲寛徒翁小伝』(竹雅翁伝記刊行会、1933年)。寛栗(山下邦雄)略歴。

1922年、県立農学校国漢科。1923年、[東京]志布志中学校へ転任。1925年、文部省出仕。1926年、文部省委託給費生。1928年、日本大学高等師範科卒業。学部に編入。

(44) 注(3) 前掲書、112頁。

(45) 『沖縄大百科事典(下)』(沖縄タイムス社、1983) 603頁。

(46) 注(2) 前掲書、164頁。

(47) 注(8) 前掲書、351頁。

(48) 注(3) 前掲書、131頁。

(49) 注(19) 前掲書、301頁。

注(2) 前掲書、117頁。

(50) 注(3) 前掲書、37～38頁。

(51) 注(3) 前掲書、37頁。

(52) 注(3) 前掲書、38～39頁。

(53) 注(3) 前掲書、39頁。

(54) 注(2) 前掲書、132頁。

入学した年の夏、茗荷谷にあった寮の舎監から「宮古島方言を調べたがって、島の出身者をさがしているロシア人がいるが、君ひとつ教えてやってくれぬか」と言われたのがきっかけとなって、はじめてネフスキーと知り合った(稲村賢敷談) 121頁。

ネフスキーが宮古方言を学んだ年度について加藤九祚や田中水絵は、稲村賢敷の記憶を基にして2019年説を取り入れている。しかし、稲村談の「入学した年」は「復学した年」の言い違いだとすると、1921年で、ネフスキーの「日記」とも適合する。

注(3) 前掲書、51～52頁。

12月31日、辞書のための語彙の筆録[約30語]

1月3日、先回の話をも最後まで整理[約100語]

(55) 注(2) 前掲書、119頁。

- (56) 注(2) 前掲書、117頁。
注(19) 前掲書、301頁。
- (57) 『宮良當壯全集 20』(第一書房、1984年) 281頁。
宮良は柳田国男らの推薦で、1924年から帝国学士院より研究補助を受け、1946年まで全国方言の調査研究に従事した。『採訪南島語彙稿』(1926)『八重山語彙』(1930)を出版した。『沖縄大百科事典(下)』1983)
- (58) 注(54) 前掲書、282頁。
- (59) 田中水絵「資料で辿るネフスキーの宮古研究—第一回採訪まで—」(『沖縄文化』第49巻1号、117、2014年11月)
- (60) 注(2) 前掲書、117頁。
- (61) 生田美智子『資料が語るネフスキー』(大阪外国語大学、2003年) 35頁。
- (62) 田中水絵「論文『音素P考』に探るネフスキーの宮古研究の道程」(『沖縄学』第10号、沖縄学研究所、2007)
- (63) 「残さびらな島くとうば」38(『沖縄タイムス』2001年10月3日)
- (64) 田中水絵「知られざる資料にみるネフスキーと沖縄の研究者(上)」(『琉球新報』2004年1月28日)
- (65) 注(2) 前掲書、119頁。
大阪外国語学校へ転任する直前、柳田国男に宛てた手紙。
- (66) 注(2) 前掲書、132頁。
稲村は夏休みには帰省したいと考えていたのでネフスキーの依頼を承諾した。しかし、その後ネフスキーとの接触は見られない。
- (67) 注(8) 前掲書、351頁。
- (68) 注(19) 前掲書、3~19頁。
- (69) 慶世村恒任『宮古史伝』(城野印刷、復刻版、1976年) 1頁。(初版1927年。再版1934年。複製1955年。新版2008年)。

